

日本 ADHD 学会 市民公開講座のご案内

日本 ADHD 学会第 7 回総会大会長
宮本信也（筑波大学特別支援教育研究センター長）

注意欠如・多動症（ADHD）とは、注意や行動のコントロールの苦手さを特徴とする発達障害の一つです。日本 ADHD 学会は、ADHD への正しい理解と対応や啓発を目的としている学会です。この度、日本 ADHD 学会第 7 回総会を開催するにあたり、市民公開講座を企画いたしましたのでご案内させていただきます。

今回の市民公開講座は、総会テーマである『ADHD における学習問題』と関連させて、学習障害についてひろくご理解いただける内容といたしました。知能に問題がないのに、なぜか文字の読み書きや計算がどうしても覚えられない子どもたちがいます。なかなか理解されにくい学習障害について、日本の第一人者の先生方にご講演をいただきます。みなさまのご参加をお待ちしております。

講演の概要

小枝 達也 先生（国立成育医療研究センターこころの診療部 部長）

ここでは、学習障害は疾患であるという立場で話をしたい。困っていることを症状ととらえ、明確な基準をもって診断し、治療したいと考えている。ICD-10 では学習能力の特異的発達障害として、DSM-5 では限局性学習症として記載されている疾患なのである。しかるに学習という言葉があるがゆえに、学校教育の問題であるとみなされてしまい、医療の対象として扱ってもらえていないという現状がある。これの打開が優先されるべきである。とくに発達性読み書き障害（ディスレクシア）については、そうした想いで 32 年間に渡って医療と研究を行ってきた。

熊谷 恵子 先生（筑波大学人間系 教授）

算数障害とは、どのようなものであるか、教育的な面からの捉え方、神経心理学・認知神経心理学的な捉え方など多方面の捉え方があり、これまではまとまっていなかった。DSM-5（APA,2013）を見ると、ようやく捉え方が整理されてきたように思われる。内容的には、数処理（数の読み書きを含めた、入出力）の問題、数概念（基数性・序数性）の問題、計算（安算と筆算）の問題、数的推論の問題の 4 つに大きく分けることができる。ただし、算数・数学の問題を捉えていくときには、全体的な知的能力水準の高さも大きく影響する。そのため、算数障害として見ていく時には、注意を要する。このように、これまでの研究を概観した上で、算数障害とは何か、その捉え方のポイントを解説する。